新春のノベルティにおける福祥のイメージ

―岩沼で配布された正月用引札―

小田島　建己

正月用引札とは

宣伝広告の媒体として印刷・配布されていた引札というものがある。引札という語は、一説には、「客を引く札」に由来し、また一説には、「客に配る（引く）札」に由来するという［増田　二〇一〇年、一六頁／樋口・佐藤　二〇一〇年、四一～四二頁］。客に配り、客を引く札としての引札の嚆矢として、天和三（一六八三）年に呉服商の三井越後屋（後の三越百貨店）が配布した「配札」がよく知られている。このとき配布された札（広告）には「現金安売無掛値」という文言が記されていたという［加藤　一九九九年、三三頁／樋口・佐藤　二〇一〇年、四二頁］。節季ごとに代金を勘定する掛売りが一般的であった時代に、掛売買により生じる掛値を廃した現金売買を広告することが、引札の祖の意図であった。つまり、掛値なしの現金売買という新商法を宣伝し、その開始を宣言する広告が、引札の始祖だと言える。

こうした札とは別に、縁起の良い事物や、目新しい事物を画題とした引札で、今日では「正月用引札」と呼ばれているものがある。正月用引札は、明治から大正にかけて、地域の商店（小売店）が、年末における掛売買の代金回収や、年始における挨拶回りの際に、得意先（顧客）に配布したものである。そのため、その画題には正月らしく福々しい図像が求められており、引札そのものがめでたさを演出するものであった。したがって、このような華美で鑑賞を目的とする正月用引札と、越後屋が配布したような宣伝に限定された引札との連続性を疑問視する見解もある［加藤　一九九九年、三四～三五頁］。たしかに、両者は顧客（あるいは顧客となることが見込まれる人々）に配付するチラシであるという点では共通しているものの、前者が具体的なメッセージを伝えるものである一方、後者は抽象的な祝意を表すものである。とはいえ、たとい抽象的な祝意のみを共示的メッセージとする引札であっても、その配付先である顧客が配付元である商店を継続して利用することへの期待が包含され、配付されたことは自明であろう。この意味では、購買をプロモートする広告という側面を正月用引札から完全に払拭することはできない。

ところで、旧暦では、三〇日ある大の月と二九日の小の月が年によって変わることになる。正月用引札にはその年の大小の月を示す略暦が合わせて印刷されているものも少なくない。江戸時代には暦師と呼ば

れる専門の業者が略暦の印刷・発行も独占しており、明治維新後もしばらくの間は独占が継続していたものの、明治一六（一八八三）年以降には略暦の印刷・発行が自由化されたことから、略暦を印刷した引札も多くみられるようになった［中谷　二〇〇八年、三四～三六頁］。とはいえ、正月用引札の画中にメインの図像の邪魔にならないように縮小されたサイズで挿入してある略暦の実用性には、自ずと限界が生じるものでもある［中谷　二〇〇八年、三七頁］。しかしながら、それでもなお略暦が刷られた正月用引札は重宝がられたことも伝えられている［三好　二〇一〇年、六一頁］。いずれにせよ、正月らしい理想的な福祥の図像のみではなく、年始以降に必要とされる現実的な機能をも引札に兼ね備えさせようとした意図を、こうした略暦の印刷に読み取ることができよう。さらに言えば、機能性を持たせることにより、福々しい引札の掲示を正月のみの一時ではなく、年内一杯継続させようとする思惑も読み取ることができる。それは、すなわち広告の持続を期待するものでもある。

本稿では、こうした正月用引札の意義を、現在の宮城県岩沼市内の商店が配布していた正月用引札を材料にして、確認したい。本稿で扱う引札は、伊藤和雄氏が所有するもので、現在は岩沼市民図書館内のふるさと展示室において保管されている。伊藤氏の生家は近世期に塩や藍の販売を手掛けた岩沼の旧家であり、近世・近代の文書が多数残されている。おそらく、本稿で扱う引札も、伊藤家に残されていたものを、和雄氏の母である伊藤禮子氏が生前に整理して保管しておいたものだと思われる[一]。禮子氏は、宮城県の南部に位置する山元町の出身で、同町の資料館に勤務し、退職後は岩沼市の文化財保護委員を務めていた人物である。引札についても、歴史的文化的資料としての価値に鑑みて、その整理・保管を行ったと思われる。このため、本稿で紹介する三〇点ほどの引札は全て良好な状態のまま現在まで保管されている[二]。

二

岩沼の正月用引札

岩沼市は、仙台市から南へ二〇キロメートルほどのところにある、人口四万人ほどの市である。市の中心部には、「日本三稲荷」の一つとして現在も周辺各地から多くの参詣者を集める竹駒神社がある。奥州街道と江戸浜街道が交わる地で、交通の要衝としての側面もあった。近世期には、岩沼は要地として要害が置かれた地である。また、二〇年と短い期間ではあるが、仙台藩の内分大名として三万石を与えられた田村氏が岩沼を拝領したことで、いわゆる岩沼藩があった時代もある。岩沼は門前町、宿場町、城下町として発展してきたのである。なお、明治二一（一八八九）年に誕生した岩沼町は、隣接する玉浦村・千貫村と昭和三〇（一九五五）年に合併して新たな岩沼町となり、その後、昭和四六（一九七一）年には岩沼市となって現在に至っている。

さて、本稿で考察する正月用引札で最も古いものは図版1の明治三六（一九〇三）年の略暦が印刷されたものである。明治三六年の略暦が印刷されていることから、おそらくは明治三五（一九〇二）年に印刷・発行されたと察せられる。広告主は渡清書店で、所在地は「岩沼町学校角」となっている。時は少し前後するが、大正五

（一九一六）年に発行された『最新岩沼町全図』をみると、岩沼小学校の東に通る旧奥州街道を少し南に行った東側に「渡邉清吉」の名がみえる（〈図〉参照）。確証はないが、ここが渡清書店であろうかとも思われる。なお、小学校の南東角には郵便局があった。岩沼では、明治五（一八七二）年に岩沼郵便御用取扱所が開設されると、明治七（一八七四）年に岩沼郵便役所に改められた［吉岡　二〇一二年、一七八頁］。ついで、明治八（一八七五）年には岩沼四等郵便局に、明治一九（一八八六）年には岩沼三等郵便局へと改められながら、岩沼町内の郵便業務が取り扱われてきた。図版1には、当時は導入されてから三〇年ほどが経過したところであった、このような郵便制度を反映した図が描かれている。郵便局員に扮した二人の天使が郵便料金の早見表を広げており、画面上部に描かれた天使が持つ手紙の送料を画面下部の天使が確認している図である。早見表には明治二六（一八九三）年から取扱いが始められた小包郵便の料金も記されている。また、画面右手に置かれた郵便箱には、郵便為替の手数料一覧も記載されている。略歴の印刷とともに、引札に機能性を付与する試みが企図された図だと言える。

図版2と図版3は、亘理屋という菓子屋の引札である。亘理屋については、明治四三（一九一〇）年に刊行された『岩沼志越里』に掲載された広告にも、その名がみえる（〈写真1〉参照）。明治三六（一九〇三）年の略歴が印刷された図版2には仁徳天皇が描かれているが、図版3の図像はだいぶ趣向が異なり、雪景色の中に揃いの着物を着た男女が描かれている。図版3の人物の装いは当時の世相を反映したものではないこともあり、芝居の一場面のようでもある。いずれにしても、これは正月用を含む引札全般に言えることではあろうが、往々にして広告主の業種や商品（この引札では「御菓子製造所」や「まんぢう」）とは特に関わりがないような図柄が用いられている。図版3については略歴が印刷されていないため新春用に配付されたかは不明であるが、図版2の仁徳天皇と、その頭上に付された枠内に記載されている「高きやに／登りてみれば／烟り立つ／民のかまどは／賑ひにけり」という歌が、新春を祝うものとして適当であると採択されたことを察することができよう。賑わう民のかまどが福祥のイメージとして用いられているのであろう。

図版4から図版9は、門前町としての岩沼の特徴を示すもので、これらの引札は、「竹駒神社献膳定宿」である高松旅館が発行したものである。年代がわかるものでは、図版5に明治三九（一九〇六）年の略暦が印刷されており、本稿で扱う高松旅館の六点の引札では最も古い。広告主は、図版4、図版6とともに「高橋松太郎」となっているが、図版7、図版8、図版9からわかるように、「高松旅館」に同じである。高松旅館は、旧奥州街道沿いにあった旅館で、引札上にも記載されているように、岩沼町警察署の斜向いにあった（〈図〉参照）。図版4および図版6の引札は縦長の形態で、ともに、二人の女性をメインの画題に描いたものである。なお、図版4の発行年は不明だが、図版6については、明治四一（一九〇八）年の略暦が印刷されていることから、その前年の明治四〇（一九〇七）年に発行され、その年末に配布されたと考えられる。

福々しい図像が求められる正月用引札における女性のモチーフについて、当時の世相に照らした分析と考察を熊倉一紗がしている。熊倉によれば、店頭に配置された盛装の女性には「豊かな消費生活という理想」が、洋装の健康的な上流階級の女性には「良妻賢母の模範としての理想」が、近接した構図で容姿が強調された女性には「外貌の美という理想」が、それぞれ表されている［熊倉　二〇一一年、二一～二五頁］。つまり、女性を主題とした正月用引札とは「時代状況の変化と極めて密接に連動した女性の理想的あり方、言い換えれば、女性にとって最も関心の高い、時代に即応した願望を表象していた」ものであって、それは取りも直さず、「世の女性たちが将来の実現を願う幸福状態をすでに表象として出現しているかぎりにおいて目出度いイメージ」なのである［熊倉　二〇一一年、二五頁］。

図版4、図版6ともに和装の女性が一人は座し、もう一人は傍らに立つ構図で描かれている。図版4には花を生ける女性が、図版6には茶を立てる女性が描かれ、両者ともに、裕福な上流階級の女性の嗜み、また、良妻賢母らしさが表されていると言えよう。さらに、図版6には、朝日に赤く染まる空を飛ぶ二羽の鶴が画面上部に、そして富士山が画面右手に、それぞれ画中画として描かれており、より正月らしいめでたさが表現されている。なお、両者には、広告主文である「竹駒神社献膳定宿」や、旅館の位置を示す「陸前岩沼警察向」（図版6では「陸前岩沼町警察署向」）や「後に四方四角のかしの木あり」といった文言が、衝立や掛軸という画中の道具に記載されている点も共通している。正月用引札は、引札の業者が予め印刷した札に、各地の印刷所が地元の商店名や宣伝文句を追加して印刷したものである［加藤　一九九九年、三一頁／樋口・佐藤　二〇一〇年、六一頁］。したがって、こうした印刷方式に則り、引札の発行元の業者が地元商店の情報を記載するための余地を確保するために考案した構図の一つだと考えられる。ちなみに、本稿で扱っている他の引札では、広告主である商店の情報はシンプルな余白に印刷されているのみである。なお、大阪の古島竹次郎（古島商店）が大手の引札業者として知られており［加藤　一九九九年、一九～二〇頁］、本稿で扱う引札にも、古島竹次郎発行のものが六点ある（〈表〉参照）[三]。

四

さて、図版7も、古島竹次郎が発行した高松旅館の引札であり、やはり女性二人が主題となっている。しかし先の二例とは異なり、屋外の、しかも水上での舟遊びをする女性を描いたものである。そこには、良妻賢母という規範性ではなく、より自由な女性像が求められているようでもある。だが、描かれた女性の雅やかな身形や振舞には、やはり当時の社会における女性の理想が反映されているようでもある。

図版5は同じく「高橋松太郎」を広告主とする引札であるが、打って変って「講話談判」という戦争に関わる題材が描かれている。画中の略暦が明治三九（一九〇六）年のものであることから、この引札は明治三八（一九〇五）年に印刷されたものと推察できる。日露戦争の講和条約がポーツマスで締結されたのが明治三八年九月五日であることから、この「講話談判」は、ポーツマス条約の講話会議であろうと考えられる。世界地図が置かれた円卓を五人の男性が囲んでいるが、画面左手に立つ二人は、画面右手の椅子に座した二人の人物に対して、

平身低頭している。右手の二人の男性は日本側の代表者（小林寿太郎であろうか）で、左手の二人がロシア側の代表者であることがわかる。画面奥の男性は仲介のアメリカを代表する人物であろう。実際の世相を反映しつつも、圧倒的な日本側の優勢が強調され、理想も反映した図像となっている。また、アメリカのポーツマスで開かれた講和会議を描いているのであろうが、画面の背景には、港町であるポーツマスらしく何隻かの軍船が描かれている他に、富士山らしき山も描かれており、正月用引札としての福祥の記号も忘れずに盛り込まれている。

正月用引札における日清・日露戦争のモチーフについては、熊倉一紗が、「七福神や松竹梅などが描かれた伝統的な吉祥イメージは、財貨の獲得や、延命長寿といった、個人にとっての理想的状態を表象しているのに対して、戦争イメージの方は、賠償金の獲得や戦争の勝利、出世の実現という帝国主義的で、富国強兵政策を推進するような国家にとっての理想の状態を表象している」と指摘している［熊倉二〇〇六年、三三頁］。つまり、「国家を担う国民＝臣民の理想的状態を表象することによって、新春の祝意を表出するという、そういう点において近代に固有の祝寿性を持つイメージ」が、日清・日露戦争を主題に描いた正月用引札なのである［熊倉　二〇〇六年、三三頁］。

図版8には「御即位禮當日祭典之圖」と、図版9には「御即位大典之圖」と画面上部に記入されていることから、天皇の即位の礼を描いたものだとわかる。図版9と全く同じ図の引札がもう一枚確認できており（図版25）、そこには大正五（一九一六）年の略歴も印刷されていることから、この引札には、大正四（一九一五）年に行われた大正天皇の即位の礼が描かれていると推察できる。とはいえ、即位の礼は一一月一〇日に行われていることを加味すると、年末に配る引札の図案は実際の礼に先立って作成されたとも考えられる。それでもなお、どちらの図においても画中の人物は束帯や十二単を着して描かれ、また、即位の礼で使用される高御座や、その数日後に行われる大嘗祭のための悠紀殿と主基殿も描かれるなど、実際の儀礼を反映しようとする意図が表れている。現実の出来事を、できるだけリアルタイムに反映しようとする引札制作者の姿勢が、図版5や図版8・図版9から窺い知ることができる。

ところで、図版4から図版9は岩沼町（現在の岩沼市）にあった高松旅館の引札であるが、そのどれもが、岩沼町警察署を旅館のランドマークとして記載している。また、伊藤家の引札コレクションに含まれていることから、これらの引札は岩沼町内で（岩沼町内でも）配布されていたことは明らかである。一般的に旅館の利用客は他地域から来訪する者であり、「竹駒神社献膳定宿」を謳う高松旅館のメインターゲットは、当然ながら竹駒神社への参詣客であろう。しかし、警察署や「かしの木」といった、地域の住民には共有されつつも、地域外の人々への有用性には疑問が残るような情報を敢えて記載し、そして地元でも配布されたであろう引札に、新規の客を獲得するような広告としての狙いは、あまり意識して設けられていたようには思えない。むしろ、継続して印刷され、配布される引札には、恒例のものとして馴染みの客をターゲットとしているようでもある。

さて、図版10から図版12は、やはり旧奥州街道沿いに面してあった

「森喜」の引札である。森喜は、先ほどの高松旅館から二〇〇メートルほど南にある（現在は二木大通りと呼ばれる）通りを挟んだ南側にあった（〈図〉参照）。森喜の引札では、明治三九（一九〇六）年、明治四一（一九〇八）年、明治四三（一九一〇）年のものが現存している。明治三九年の引札としては、図版10の森喜のものの他に、図版5の高松旅館のもの、図版13の阿部吉太郎（阿部吉商店）のものがある。図版5は、先に確認したように、日露戦争の講和会議を画題としており、図版13には三人の子ども（内一人は赤子）と夫婦であろう男女の肖像が描かれている。そこには明治三九年の略歴が印刷されているが、その前年の明治三八（一九〇五）年には、明宮嘉仁親王（後の大正天皇）の第三皇子として光宮（後に高松宮）宣仁親王が誕生していることから、この図は、当時の嘉仁親王一家を映したものであると考えられる。こうした図像には、戦争イメージと同様の国威発揚が表されていると同時に、国家の発展が延いては国民の幸福だと据えた上での祝意が込められているのであろう。図版10も、一見すると七福神が描かれたまさに正月らしくめでたい図像だと捉えられるが、大黒天の衣裳を含め画面の其処此処にみられる日章旗の意匠や、軍用馬を髣髴させる猛々しい馬や、その陰で布袋が掲げる「名声轟四海」と書かれた旗など、国威発揚の趣向の枠組みに位置付けられるものでもあり、やはり時代性が反映されていると考えられる。

図版11には、図版4・図版6のように二人の女性が描かれており、それぞれが華道と茶道に関連した図像で描かれている。富裕層の女性という理想像が映されていると言える。また、興味深いことに、図版11の女性二人の構図は図版4を踏襲したものであり、この左手の女性が座し、右手の女性が立ち、互いに振り返るかたちで目線を交す構図は、図版7にも共通している。図版4については印刷年が不明だが、図版11が明治四一（一九〇八）年用、図版7が明治四二（一九〇九）年用の引札であり、ともに古島竹次郎によるものであることから、後者が前者を参考に作られたことが窺える。図版12も森喜の引札であるが、そこにはバイオリンを弾く女性が描かれている。やはり、上流階級の女性の美についての理想を描いたものだと考えられるが、画面右上の丸く区切られた枠内には赤く染まる空と鶴という福祥のイメージも描き込まれている。また、女性の背面には「君が代」の楽譜も書かれていることを合わせ考えると、上流階級の優美な女性像というイメージとともに、国家の臣民としての理想を表象する図像として用いられていると思われる。

図版14と図版15は、図版13と同じく、阿部吉太郎（「阿部吉」）が広告主の引札である。なお、阿部吉は森喜の向かいにあった商店である（〈図〉参照）。図版14は明治四三（一九一〇）年に印刷・発行されたものであるが、そこには、明治三九（一九〇六）年の図版13とは異なり、国威発揚を表現するイメージではなく、より個別化（私事化）した理想とも言える富裕さが描かれている。画面下部には小判や紙幣や貨幣が散りばめられ、俵の上に立つ大黒天の手に下げられた掛軸には、神名を捩った「八幡大現金」、「天照皇大福帳」、「春日大勉強」という、商店らしい金銭的な富を象徴する文字が記されている。この趣向は、大正五（一九一六）年の略歴が印刷された図版15にも共有されており、

六

同様に画面左手に恵比須、その背後となる画面右手に大黒天が描かれている。そこには「箕に入るる／こがねの玉に／ひかりかな」という歌が書かれ、金銭的裕福さを理想とする図像となっている。国家としての富栄を福祥の図像としていた図版13から一〇年の間に、引札に象徴的に表される福祥のイメージが変化してきたことを読み取ることができよう。なお、図版15は構図の点でも図版14に共通しているが、さらに言えば、先述の図版4、図版7、図版11にも通じる構図でもあることに気がつく。左手の人物を座らせて、右手の人物を立たせ、振り向きがちに二人の視線を交わらせるという構図は、二名の人物を描く際の構図として、定型化されていたように思われる。

図版16と図版17は「高庄」の引札である。図版16には舟の上で海藻を採る恵比須と大黒天が描かれており、画面右上に「藻刈や／宝来山の／初日の朝」という歌が記されている。「藻刈」には「もうかり」と振り仮名がつけられており、「儲かり」に掛けられた句であることがわかる。また、「初日の朝」という句とともに、背景には、初日の出の中を飛翔する鶴と松が福祥の図像として描かれている。図版6と図版11が同年に発行されたものでありつつ女性を主題とする引札であるのに対し、図版16はよりストレートな福祥のイメージを採択している。正月用引札は、原版の発行所となる印刷所がつくった見本帳をもとに、各地の印刷業者を通じて、広告主となる地元商店からの注文を集約する仕組みであった［樋口・佐藤　二〇一〇年、六一頁／増田二〇一〇年、四七頁］。見本帳からどの図版を選ぶかは各商店の好みに委ねられており、同時代でも国家主義的な図像を選ぶか、あるいは、より個人主義的な図像を選ぶかは、分かれるところである。もちろん、同じ引札を別の商店が利用することもあり、先述した図版9と図版25はそうした一例である。また。高庄が明治四五（一九一二）年の正月用に配付した図版17の引札と同じものが、岩沼町外の、下駄足駄を扱う「栄町三丁目」の「小澤平吉」に利用されている[四]。片や牛乳を扱う商店、片や履物を扱う商店と、全く異なる業種の商店でも、同じ図像の引札を利用することが間々あることがわかる好例である。

図版19は、高松旅館の北側（『岩沼町全図』では二軒北側）にあった高橋養吉（「高養」）の引札であり、明治四一（一九〇八）年に印刷・発行されたものである。この高養は、明治三五（一九〇二）年の「開店御披露」の引札（図版18）も残っているため、当時はまだ開店から五年余りしか経っていない商店であったことがわかる。なお、図版18は、「岩沼隈北活版印刷所」という印刷所名の記載もあり、岩沼町にも印刷所があったことがわかる資料ともなっている。図版19は、金の地の上に、朝日を背景にして、松の前に鶴が四羽と雛が一羽配置されている。いかにも正月らしい吉慶の図像だが、右下に「應擧」という落款があることからも、円山応挙の群鶴を描いた屏風から着想を得た図であろうことが察せられる。この高養の引札には、味噌と醤油の醸造販売を広告の主文としつつ、「第五回勧業博覧会／褒状受領」の宣伝も記載されている。高養については、その広告が『岩沼志越里』に掲載されているが（〈写真2〉参照）、そこにも「第五回内国博覧会／褒状授与」と、同趣旨の言葉が記されていることから、それは新進の商店であった高養にとって絶好の宣伝文句であったことが窺える。正

月用引札の図像は福祥のイメージに重きをおくあまり、商店・商品の具体的な宣伝には、図像ではなく、言葉に頼る必要があったことがよくみてとれる引札である。

図版20の広告主である大泉堂は、図版2と図版3の広告主である亘理屋と同業の菓子屋で、『岩沼志越里』にも亘理屋と並んで広告がみえる（〈写真1〉参照）。明治四二（一九〇九）年の略暦が印刷されているこの引札の記載からは、大泉堂は「中横丁角」にあったようだが、大正五（一九一六）年の『岩沼町全図』では確認できない。引札には男児と大人の女性の二人が描かれているが、正月らしく、男児は凧を、女性は羽子板を持っている。他にも新春の記号として梅と鶯が描画されている。全体的に暖色で彩られたこの引札は、暖かい春の到来を予感させる図となっている。

図版21と図版22は、小間物・荒物を扱っていた三浦金右衛門の引札である。三浦は、図版10から図版12の森喜の数軒南側にあった商店である（〈図〉参照）。図版21には明治四三（一九一〇）年の略暦が記載されている。小間物・荒物を扱う同業者であった阿部吉太郎の明治四四（一九一一）年の引札（図版14）と同じように、そこには大黒天と恵比須が描かれ、より個別的（個人的）な富を幸福の象徴としている。積み上げられた貨幣の中に座した恵比須の手には証券の束が捲られており、その後に控えた大黒天の右手は「印紙税法早見」を提げ、左手は「郵便早見」を指している。国家隆盛や美人画ではなく、経済的な富裕さを直接に強調することで、正月に求められる福祥を表わした図像となっている。図版21と同じ三浦金右衛門の引札である図版22は、図版21の翌年の略暦を持つものであるが、あからさまな金銭的イメージは弱められた図像となっている。「勉強商店」の看板を掲げた店前に「大売出」の幟や、「特別」や「飛切」といった言葉が入った提灯が並び、その下は多くの人で賑わっている図である。画面の手前には親子らしい女性と女児が並んで描かれているが、和装の母親も洋装の娘も裕福そうな出立ちである。そこには、熊倉が言うところの「豊かな消費生活という理想」が表されていると言えよう［熊倉二〇一一年、二一頁］。

図版23から図版25は、大正五（一九一六）年の『最新岩沼町全図』では警察署の二軒南に記されている堺平内（堺平商店）を広告主とするものである（〈図〉参照）。呉服太物を主に扱っていることもあってか、堺平内の正月用引札は、明治四三（一九一〇）年と明治四五（一九一二）年のものは、ともに和服姿の女性を前面に据えた図像となっている。図版23では、日の丸を思わせる赤い円の中に大黒天と恵比須が、画面右手に背景として描かれた梅と松とともに、福祥の記号となっている。図版24では、メインの背景は竹林になっており、その左上に雀が一羽描かれ、梅も数枝描かれている。正月らしさは、女性が手に持っている羽子板に表わされるに止まっている。恵比須や大黒天などの福の神や、よりストレートな金銀財宝を富の象徴として前面に押し出す図像がある一方、図版23と図版24は比較的穏やかな福祥の図像となっており、方向性は図版20に似通ったものである。なお、図版25は、すでにみた髙松旅館の引札（図版9）と同一の図像である。

図版26は新聞の販売を主要サービスとする松尾孝平の引札である。

明治四四（一九一一）年の略暦が記載されているが、画中には電話で話す女性が描かれている。奇しくも岩沼で電話業務が開始されたのは同じ明治四四年のことで、開始当時の電話加入は二四台であった［相原　二〇一二年、二〇九頁］。電話の相手は画中画のように背景に描かれている恵比須であり、その傍らに呉服が掛けられ、また画面手前では右手の女性が反物を広げていることから、電話を通じて呉服太物を取引しているようである。広告主の松尾は古着商でもあったことから、この図を選択したのかもしれない。また、岩沼ではまだ珍しかったはずの電話とその利用が描かれた図像を採用することで新奇性を前面に出し、引札の受領者（顧客）の関心を惹く狙いもあったのかもしれない。なお、本稿で扱っている引札で、電話番号が記載されたものは、高松旅館の二点（図版8と図版9）、堺平内の二点（図版24と図版25）、後述する菊幸商店の一点（図版28）とさかひやの一点（図版30）の、計六点のみであることからも、当時の電話がいかにイノベーティブであったかを理解できる。

図版28が数少ない電話番号が記載された引札の一つであり、広告主は菊幸商店である。菊幸商店は堺平商店と警察署の間にあった商店で（〈図〉参照）、履物を扱っていた。明治三六（一九〇三）年には略暦のみの引札が配られたが（図版27）、大正五（一九一六）年には金色の下駄に戯れる恵比須と大黒天と思しき人物が描かれた正月用引札が配られている。この一〇年ほどの間に正月用引札が岩沼に浸透した事実をみてとれる。また、図版28は珍しく広告主の商売の内実に符合した図像となっている。

だが、本稿で確認してきた引札では、広告主の業種や商品と引札に描かれた図像との間に、明確な関連性を指摘できるものは少ない。また、商品やサービスと無関係に選ばれる画題も、時に「講話談判」や「御即位大祭」のような現実の出来事をリアルタイムに反映したものがある一方で、時には七福神のような神話的なキャラクターが描かれるものもある。また時には、優美さを理想化したような女性像が主題になることもある。同じ商店でも、年によってどの図像を選択するかは分かれるところであり、また同じ年に発行された引札でも、商店によって図像は区々となる。そうした多様な図像に共通していることは、正月らしい福祥のイメージを盛り込むことで、引札そのものを縁起物としようとする印刷業者の狙いであり、そして、それを得意先に配布することで新春の祝賀を伝えようとする商店の想いである。

正月用引札の意義

本稿で確認してきた引札から、岩沼では明治末に正月用引札が多く出回るようになったことがわかる。この動きは全国的な傾向と軌を一にしており、東北の一地方へ波及するにあたっても然したるタイムラグが生じないほどまでに、正月用引札が人気を博していたであろうことが理解できる。だが、こうした正月用引札の隆盛は、思いの外早く終ることになり、大正以降、徐々に女性を描いた美人画ポスターに取って代わられることが指摘されている［熊倉　二〇一三年、六八頁］。本稿で確認した伊藤家に残された正月用引札でも大正五（一九一六）年が最後のもので（図版25と図版28、〈表〉参照）、岩沼でも同様に

衰微していったことが窺える。当時のポスターは、「画家が描き起こした下絵に広告主のロゴや店名・商品名を上書きしただけのものであり、文字の装飾性や全体的な構図にあまり留意していない、つまり絵の部分と伝達される意味論的情報とが有機的な連関を形成していない」ものであり、「絵が放つアウラの保持―〝あからさまな広告に回収されてはならない〟―が美人画ポスターにとっての至上使命であった」ものである［北田　二〇〇八年、九四頁］。このような美人画ポスターにおける図像と広告主（商品）との無関係性は正月用引札とも相通じる性質であり、それらの親和性・類似性を指摘できる。だからこそ、引札からポスターへの移行が速やかに進められたことの説明も、説得力を有することができるのであろう［熊倉　二〇一三年、六八～六九頁］。それと同時に、このような性質が共有されつつも、正月用引札が正月に相応しい福祥のイメージによって祝意を示しているのに対し、美人画ポスターにはそのようなメッセージがなく、美人女性像がデノテーションとして示されているのみである。

図版29と図版30は、岩沼にあった「さかひや」が広告主の美人画ポスターである。印刷・発行年は不明だが、図版30には三桁の電話番号も記されているため、おそらくは大正以降、それも正月用引札から美人画ポスターへの移行期において、印刷されたものであろうと思われる。どちらにも共通して、店名に加えて「文化食品店」・「各種機械油特約」の宣伝文句が記載されているが、図像はそれとは無関係の写実的な女性像である。略暦の印刷もなく、年末年始に配布されたのかも不明だが、伊藤家では他の正月用引札と一緒に保管されていたことから、顧客側の意識としては、正月用引札と同種のものと受け止められていたのであろうと察せられる。たしかに、広告主の業種や商品・サービスと描かれた図像との間にある無関係さは正月用引札に通じるものであり、特に、女性を主題とする引札の系譜に連なるものであろう。だが、それでも、引札に供えられていた福祥のイメージは、ポスターでは鳴りをひそめ、祝意のコノテーションも失われている。

特定の商品やサービスを宣伝する広告は、その購買者や利用者に、その商品やサービスを所有したり利用した場合の可能的幸福を自らの未来像として評価させることで、商品やサービスの魅力を伝える［バージャー　一九八六年、一六三～一六四頁］。ところが、正月用引札にデノテーションとして表された図像は理想的女性像や国威発揚や空想的神話的な富などであって、それらの字義通りの所有を宣伝するものではない。だが、そうした福の象徴的メッセージを顧客に贈与することによって、祝福を与えるものでもある。福祥のイメージを持った引札のコノテーションは、その引札を配る商店からの顧客への祝福の挨拶なのである。めでたさそのものである引札を配することによって、得意先の家々に福を齎そうとするものなのである。さらに言えば、この祝福を受けた顧客が、その返礼として、引札を配布した商店を利用することを期待しているものでもある。

正月用引札のカスタマーであった地元商店が自覚的であったかどうかは別にして、こうしたメカニズムの上に、正月用引札の配布習慣が成立していたからこそ、商店が提供する商品やサービスと無関係の図像が描かれていても、それが福祥のイメージである限り、正月用引札

としての機能を有し、商店にも採択されていたのであろう。ところが、引札の後継とも言うべきポスターには、福祥の贈呈、祝福の働きは引き継がれなかった。また、正月用引札の機能的側面である略暦を最大限に継承したと言えるカレンダーがノベルティとして今日では顧客に配布されている。だが、こうしたカレンダーは機能的・合理的側面のみを有し、かつての引札にあった福祥のイメージは、やはり希薄化している（〈写真3〉参照）。引札に印刷された略暦では疑問視されていた機能性も、カレンダーでは過不足なく発揮されてはいるが、それが飾られる家庭に福を齎すことは、その主題ではなくなっている。正月用引札から美人画ポスターや機能的カレンダーへの移行に並行して、商店と得意先の間での祝意の象徴的交換を促す互酬性が薄れたことに、コノテーションとしての祝福を表す福祥のイメージを有さないノベルティへと収斂していった要因をみるのは、強ち穿ち過ぎた見方でもなさそうである。

謝辞

本稿に不可欠な資料である引札の使用を快く承諾していただき、かつ、それらの画像を提供していただいた伊藤和雄氏に、末筆ながら改めて深謝申し上げる。また、引札に記載されたくずし字の読解や文脈の理解にあたっては、伊藤大介氏、高橋恭寛氏、徳竹亜紀子氏に協力いただいたことにも、記して感謝申し上げる。

註

一　伊藤和雄氏からの聞取りによる。

二　伊藤和雄氏は、現在、岩沼市の教育委員会に文化財担当の嘱託職員として勤務している。筆者も、同様に市史編纂担当の嘱託職員として勤務しており、伊藤氏は岩沼市民図書館（＝新図書館）内のふるさと展示室に勤務、筆者は市史編纂室（旧図書館）に勤務している。地理的な距離は若干あるものの、心理的な距離ではいわば隣の部署に勤務しているという感がある。こうした縁もあり、伊藤氏所有の引札を知る機会に恵まれ、また本稿での使用を快諾いただくことができた。

三　なお、古島竹次郎（古島印刷所）による引札は、石川県金沢市、福岡県福岡市、香川県さぬき市、京都府京都市、滋賀県蒲生郡、和歌山県伊都郡、埼玉県所沢市、福島県会津若松市。岩手県水沢市でも利用されていたことが確認されている［樋口・佐藤　二〇一〇年、六二頁］。

四　仙台市歴史民俗資料館 編『あきないの民俗―看板・引札・ちらし―』仙台市教育委員会　二〇〇五年、三三頁に掲載されている。なお、『あきないの民俗』では「栄町」については触れられておらず、どこの町名かは不明である。

〈図〉大正５（1916）年に発行された『最新岩沼町全図』の一部

〈表〉引札一覧

図版番号	種別	略暦年	印刷年	印刷発行者	広告文	住所等	広告主
1	正月用引札	明治36				岩沼町学校角	渡清書店
2	正月用引札	明治36			御菓子製造所	岩沼南町	亘理まんちうや
3	引札				和洋御菓子／名物まんぢう	陸前岩沼町	亘理屋
4	引札				竹駒献膳定宿／御料理仕出し／蒲焼	陸前岩沼警察向旅館	高橋松太郎
5	正月用引札	明治39			竹駒献膳定宿／後に四角大木の／かしの木を目印二願拝	警察署向へ旅館／陸前岩沼町	高橋松太郎
6	正月用引札	明治41			竹駒神社／献膳定宿／後に四方四角のかしの木あり	陸前岩沼町警察署向／旅館	高橋松太郎
7	正月用引札	明治42	明治41	古島竹次郎	竹駒神社献膳御定宿／後に四方四角の大木のかしの木あり	陸前名取郡岩沼町警察署向へ	高松旅館
8	正月用引札				竹駒神社／献膳定宿	陸前岩沼警察署向へ／電話二十八番	高松旅館
9	正月用引札				竹駒神社献膳定宿	陸前岩沼警察署向へ／電話二十八番	高松旅館
10	正月用引札	明治39			呉服太物類京染取次／荒物金物鑄物小間物漆器陶器／外雑貨各種度量衡器販賣	名取郡岩沼町／商号森喜	森喜内
11	正月用引札	明治41	明治40	古島竹次郎	呉服太物／度量衡器／鑄物雑貨／京染取次／東側にて店の北に石藏あり	岩沼南町一丁目	森喜内
12	正月用引札	明治42	明治41	古島竹次郎	呉服太物／鑄物雑貨度量衡器／京染取次	陸前岩沼町／商号森喜	森喜内
13	正月用引札	明治39			和洋小間物荒物商	陸前岩沼町	阿部吉太郎
14	正月用引札	明治44	明治43	古島竹次郎	和洋小間物荒物商	陸前岩沼町	阿部吉太郎
15	正月用引札	大正5			和洋小間物荒物商	陸前岩沼町	阿部吉太郎
16	正月用引札	明治41	明治40	古島竹次郎		陸前岩沼町	高橋蹄鉄工場／高橋搾乳所／大河原支店
17	正月用引札	明治45				名取郡岩沼町	高庄牛乳搾取場／同電力精米所
18	広告引札		明治35	岩沼隈北	開店御披露／広告／拝啓秋冷（中略）／追而当日よりより向三日間開店の印までに（後略）	岩沼町貳百四拾六番地／味噌醤油販賣店	高橋養吉
19	正月用引札	明治42	明治41	古島竹次郎	第五回勧業博覧会／褒状受領／味噌醤油醸造販売／専賣局指定塩元売捌人	陸前岩沼町	高橋養吉
20	正月用引札	明治42			御菓子製造所／名物もなか	陸前岩沼町中横丁角	大泉堂
21	正月用引札	明治43			和洋小間物荒物紙／砂糖油類藍繭生糸	陸前岩沼町	三浦金右衛門
22	正月用引札	明治44			和洋小間物荒物紙／砂糖油類藍繭生糸	陸前岩沼町	三浦金右衛門
23	正月用引札	明治43			呉服太物染料箪笥／和洋鉄類蹄鉄釘特約販賣／確実／正札附	陸前岩沼町／電略（サカイ）又ハ（サ）／振替東京三弐四二番	堺平内
24	正月用引札	明治45			呉服太物染料箪笥／和洋鉄類蹄鉄釘特約販賣／確実／正札附	陸前岩沼町／電話四番電略（サカイ）（サ）／振替東京三二四二番	堺平内
25	正月用引札	大正5			呉服太物商／京染取次	陸前岩沼町／電話四番	堺平商店
26	正月用引札	明治44			諸新聞取次販売／古着商／	陸前岩沼町	松尾孝平
27	略暦	明治36			萬下駄鼻緒桐材／内外煙草各種	陸前岩沼町／電信／略号／（キクコ）	菊幸商店
28	正月用引札	大正5			はきもの商	陸前岩沼町／電話三十六番／振替一三六五八番	菊幸商店
29	ポスター				文化食品店／各種機械油特約	宮城県岩沼町	さかひや
30	ポスター				文化食品店／各種機械油特約	宮城県岩沼町／電話百二番	さかひや

〈写真２〉『岩沼志越里』に掲載された
高橋養吉の広告（右頁上）

〈写真１〉『岩沼志越里』に掲載された
亘理屋と大泉堂の広告（右頁１・３列目）

〈写真３〉平成26（2014）年末に
岩沼市内の商店が配布したカレンダーの例

一四

〈図版１〉

〈図版２〉

〈図版３〉

〈図版４〉

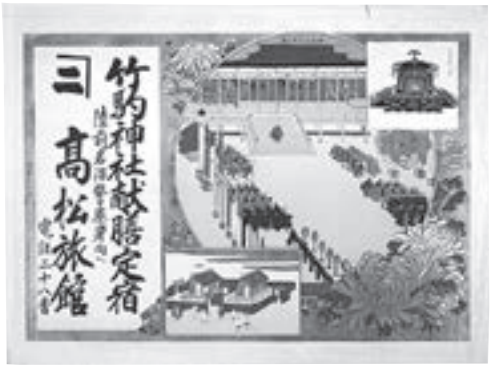
〈図版５〉

〈図版６〉

〈図版８〉

〈図版７〉

〈図版10〉



〈図版９〉

〈図版12〉

〈図版11〉

一六

〈図版14〉

〈図版13〉

〈図版16〉

〈図版15〉

〈図版18〉

〈図版17〉

〈図版20〉

〈図版19〉

〈図版22〉

〈図版21〉

〈図版24〉

〈図版23〉

一八

〈図版26〉

〈図版25〉

〈図版28〉

〈図版27〉

〈図版30〉

〈図版29〉

引用・参考文献

相原孝志「岩沼に電信・電話が通った」岩沼市史編纂委員会 編『子ども岩沼市史』岩沼市 二〇一二年

荒川偉三郎 編『岩沼志越里』東北文芸社 一九一〇年

加藤貴裕「引札の研究―正月用引札の実際と系譜について―」『日本文化論年報』第二号 神戸大学国際文化学部日本文化論大講座・大学院総合人間科学研究科日本文化論講座 一九九九年

北田暁大『広告の誕生―近代メディア文化の歴史社会学』岩波書店 二〇〇八年

熊倉一紗「近代日本の国民国家と寿き―正月用引札における日清・日露戦争イメージに関する一考察―」『大正イマジュリィ』No.2 大正イマジュリィ学会 二〇〇六年

熊倉一紗「正月用引札の広告機能―女性主題の変遷を手がかりに―」『デザイン理論』第五九号 意匠学会 二〇一一年

熊倉一紗「正月用引札のサバイバル―美人画ポスターとの関係」『美術フォーラム21』第二七号 美術フォーラム21刊行会 二〇一三年

仙台市歴史民俗資料館 編『あきないの民俗―看板・引札・ちらし―』仙台市教育委員会 二〇〇五年

中谷哲二「幕末明治の引札と画入り暦」『日本印刷学会誌』第四五巻第四号 日本印刷学会 二〇〇八年

難波功士『「広告」への社会学』世界思想社 二〇〇〇年

バージャー、ジョン『イメージ 視覚とメディア』伊藤俊治 訳 パルコ出版 一九八六年

バルト、ロラン『映像の修辞学』蓮實重彦・杉本紀子 訳 筑摩書房 二〇〇五年

樋口知志・佐藤友理「引札に見る近世・近代の社会と文化」『アルテスリベラレス』第八六号 岩手大学人文社会科学部 二〇一〇年

福山市鞆の浦歴史民俗資料館 編『瀬戸内の港町ゆかりの看板・引札展～ユニークで滑稽な広告文化～』福山市鞆の浦歴史民俗資料館 二〇一〇年

増田太次郎『引札絵ビラ風俗史 新装版』青蛙房 二〇一〇年

三好一「引札・広告びらについて」福山市鞆の浦歴史民俗資料館 編『瀬戸内の港町ゆかりの看板・引札展～ユニークで滑稽な広告文化～』福山市鞆の浦歴史民俗資料館 二〇一〇年

吉岡一男「岩沼郵便局の誕生」岩沼市史編纂委員会 編『子ども岩沼市史』岩沼市 二〇一二年